実践研究
私の保育ノート

心躍る時間 ―「水」と一緒に―

松田千嘉子
（保育士）

２０２０年４月、私の保育者としての１年目は、新型コロナウイルス感染防止対策による、緊急対応の中で始まりました。家庭保育の協力をしてくださる家庭が多くある一方で、医療などに従事している家庭のため登園する子もいました。クラス全員が登園するようになると、もうすでに園に慣れている子もいれば、今日登園を始めたばかりの子もいる。ちぐはぐな環境のようで、子どもたちの自分のペースを保ちやすい環境だったように思います。

初めての水遊び

全員が園に慣れ始めた頃に、暑い夏がやって来ました。０歳児どんぐり組では、室内での水遊びが始まりました。水といってもぬるま湯です。最初は警戒して怖がっていた子も徐々に慣れていき、楽しむ様子が見られました。特に水遊びが大好きなＦくんは準備を始めるといち早く気づき、入り口の柵につかまり立ちをして笑顔で顔をのぞかせます。柵の上から目だけ出して、時には背伸びをしながら、「僕の番かな？」とのぞいています。言葉

松田千嘉子（まつだ ちかこ）
文京区立お茶の水女子大学こども園保育士。

は何も発しなくとも表情から期待感が伝わってきました。洗濯機の水の音が聞こえてきても水遊び場をのぞきに行っていて、音からも状況を判断していることに驚かされました。

7月から登園を開始したDくんは、保育者に抱っこされた状態からなかなか動くことができませんでした。家庭ではお風呂の時間を楽しく過ごしているそうで、苦手なわけではないのなら、園でも水の心地よさを感じてほしいと思っていました。ある日、玩具を手渡すと興味を示し、保育者から片手が離れました。試してみるタイミングかもしれないと思い、声をかけながら慎重にシャワーをかけてみました。片腕が保育者から離れなければ、玩具片手にシャワーを浴びることができました。その日以降は、壁の水滴や玩具を使って楽しみながら、短い時間シャワーを浴びました。子どもの小さな変化を受けとめて働きかけることの大切さを感じました。

その後、戸外でも水遊びをしました。Fくんは戸外で過ごすのが以前から大好きだったので、大好きな場所で大好きな水遊び。全身びしょぬれになりながら楽しんでいました。最初は水を張ったたらいを前にして、玩具で水をすくって、ひっくり返して、と楽しんでいたのですが、突然立ち上がり、じょうろを上に掲げて水を出しました。自分の顔がぬれるのもまったく気にせず、手を高く伸ばして、満面の笑顔で水を浴びていました。他クラスの子どもたちが周囲で見ていたのですが、周りなんて気にせず大胆に思いっきり自分のやりたいことを楽しむ姿にたくましさを感じました。室内では絵本を読んだり、歌に合わせて踊ったりという姿が多く見られるFくんの、全く違った一面を見ることができました。気温や風の強さ、子どもの体調などの理由から、

数回しかできませんでしたが、数回でもやってよかったと心から思います。隣にいるだけで弾ける楽しさが伝わってきて、こちらも楽しくなる時間でした。

「10月」の異年齢での水遊び

土曜保育は異年齢で一つの部屋で過ごします。その日は1歳児クラスの子どもから5歳児クラスの子どもまで6人で過ごしました。10月でしたがとても暖かく、園庭でみんなではだしになって遊びました。そこで自然と始まったのが「お風呂作り」でした。4歳児のSちゃんと5歳児のHくんが主導して穴を掘り始めました。4歳児のYちゃんは隣にベッドを作っています。ホテルのイメージだそうです。盛り上がっている頃に、5歳児のAちゃんが登園してきました。みんなの様子を見て「靴置いてくる」と、はだしで遊ぶことを決めました。しかし「お風呂作り」にいきなり参加するのもためらわれるようで、テラスに座って悩んでいる様子でした。私はAちゃんのタイミングに任せようと思い、その後Aちゃんが誘ってくれたフラフープ遊びなどで一緒に遊びながら、お風呂の様子を見守っていました。いよいよ穴が完成しました。Hくんが水を運ぶのにバケツではなく、たらいを使うといいと提案してくれます。私が「たらいに水を入れると重いよ、持てる?」とHくんと話していると、それまで他の遊びをしていたAちゃんが「いちょう組2人なら持てる!」と元気よくHくんのところへ手伝いに行ったのです。最高学年である、いちょう組としての自信が見えました。言葉通り、2人で何度も運んでいました。お風呂が出来上がると、1歳児のRくんが、勢いよく入っていきました。先に入っていたSちゃんは「顔にかかる!やめて!」と言いながらもRくんの思いっきり遊びたい気持ちが伝わったのか、少し距離

をとってRくんの場所を確保していました。その間も、いちょう組の2人は水を運び続けています。出来上がったもので遊ぶ楽しさと、作り上げていく楽しさと、子どもそれぞれに達成感を感じる瞬間が違うようでした。

充実したお風呂遊びと大変な着替え、楽しい食事を終えてから、「10月にやるべき遊びではなかったのではないか?」という思いが自分の中に広がりました。日当たりが良く、とても暖かかったとはいえ、風が吹けば涼しさも感じる季節です。水ではなくお湯を使いましたが、お湯はどんどん冷めていってしまいます。一方で、異年齢で少人数の時間だからこそ見えた心が動いた瞬間や、何もないところから遊びが始まり広がっていく大切な時間であったとも思うのです。

後先考えず一緒に水遊びをした経験は、私の中でとても大切なものになりました。あの日の天気と登園していた子どもたちと、それを見守っていてくれた他の先生方のおかげで、日常と違った環境の中で子どもたちと心から楽しんで遊ぶという体験ができました。

0歳児のクラスの中での水遊び、異年齢での水遊び。どちらもそれぞれに見えてくる姿が違ってとても興味深いです。水は身近な素材でありながら、遊びに使うと特別な存在になるような気がします。教育実習のときに、砂場に水を入れて、毎日勢いよく飛び込んでいった子どもの笑顔を今でもよく覚えています。緊張していた気持ちをほぐしてくれる、幸せを感じる笑顔でした。あの時抱いた楽しい幸せな気持ちはずっと大切にしていきたいと思います。そして、身近にあるものに触れる楽しさ、創り出す楽しさをこれからも子どもたちの隣に並んで、一緒に楽しんでいきたいです。